

ハンドベル演奏の教育的意義についての一考察

安 田 淳 子

Assessing the Educational Significance in the Handbell Performance

Junko YASUDA

駒沢女子短期大学「研究紀要」

第 48 号 抜 刷

平 成 27 年 3 月 発 行

ハンドベル演奏の教育的意義についての一考察

安田 淳子

Assessing the Educational Significance in the Handbell Performance

Junko YASUDA

ハンドベルは、個々のベルが一つになって初めて楽器としての存在を示す。演奏者（リンガー）一人ひとりが自分で担当するベルを自分の音のところで鳴らし、全体が一つに調和して音楽を奏でる演奏形態が特徴である。

本稿では、ハンドベル演奏の実践を通して、その音楽的魅力と、教育的意義について考察する。

キーワード：ハンドベル演奏、学燈会、社会貢献、教育的意義

I はじめに

筆者が、ハンドベルに出合ったのは平成5年のことである^{注)}。ハンドベルの優美で清澄な響きとその独特な演奏形態に、ピアノ演奏とは異なる音楽的魅力を感じた。

以来、その時々々の学生と共にハンドベル演奏に取り組んできた。平成14年度以降は、主に学外での社会貢献活動としてハンドベル演奏を継承してきたが、保育科生を取り巻くさまざまな環境の変化により25年度には、活動を休止せざるを得ない状況が生じていた。

今年度、学燈会で学生と共に発表したハンドベル演奏では、その流れが再び繋がりが、音楽をする心や喜びが、演奏する仲間との、また聴衆との一体感を生み、感動や楽しさを共有することが出来た。筆者にとっても、改めて、ハンドベルの魅力や、その音楽的、教育的な価値を再認識する機会となった。

ハンドベルは、個々のベルが一つになって、すなわち、演奏者一人ひとりが自分に決められた音に責任を分担して各自が調和し一体となって始めて、楽器として音楽を奏でることが出来る。

一定の音楽目標に向かって互いに協力し、常に仲間と共に演奏するのが、ハンドベル演奏の大きな特徴であり、また魅力的なところである。

本稿では、ハンドベル演奏の実践を通して、ハンドベルの音楽的魅力や教育的意義について考察を行う。

II ハンドベルとは

初めに、ハンドベルについての基礎的な知識を確認し

ておきたい。

1. ハンドベルについて

(1) ハンドベルは、正式にはイングリッシュ・ハンドベルと呼ばれる、音律を持った打楽器である。

演奏楽器としては比較的新しい。

原型は、今から400年ほど前に、教会のタワーベルの練習用にイギリスで考案された。ベルを手で鳴らすことが出来るようになると、次第にかなりまとまったメロディーやハーモニーが奏でられるようになり、ベルの数も増え、ベル自体にも改良が加えられて、現在のような演奏楽器となった。

ハンドベルは、20世紀の初めにアメリカに渡り、その後飛躍的に普及している。

日本で始めてハンドベルが鳴らされたのは1964年（昭和39年）、台湾の神学校のクワイアによる演奏が最初であると伝えられている。名古屋の学校でハンドベルクワイアが結成された1970年から、日本での本格的な演奏活動が始まった。

その後、1976年に日本ハンドベル協会が結成され、主に中学や高校のミッションスクールを中心に普及し、徐々に教会や大学レベルまで広がっていった。連盟の設立当時にわずか7チームであったハンドベル演奏のチームは、今日では、日本全国で600以上の連盟所属のチームが活動している。

ハンドベルの響きが人々をつなぎ、その魅力を分かち合い楽しんでいるといえるであろう。

参考1:「大図説 世界の楽器」¹⁾によると、ハンド

ベルは、体鳴楽器（それ自体が鳴る素材で作られた楽器）に分類され、発音の仕方（八つの基本形がある）の中で最も多い「打つ」楽器（その形状によって多くの小部門に分かれる）の小部門・舌つきベルに属する。教会の鐘や日本の鐘（叩き鐘）も「打つ」原理をもとにした楽器に属する。

参考2：古代ベルの出現から、日本におけるハンドベルの歴史については、「イングリッシュ・ハンドベルとハンドチャイムのリンガーと指導者のための教本」²⁾第5章 ベルの変遷に詳しい。

- (2) ハンドベルは、内側にベルを鳴らす振子（振った時に一方向だけ往復する：クラッパー）を取り付けた金属の本体部分（キャストイング）に、ハンドルがついて一つのベルとなる。

キャストイングは、普通は銅と錫の合金で出来ていて、銅77パーセント、錫23パーセントの割合の配合が最も美しい音色を出すと言われている。

- (3) ハンドベルは、一つ一つが異なる音を持ち半音階に調律されている（大きさも重さもそれぞれに違う）。

個々の音は、ベルのハンドルに、英・米音名（C D E F G A B）と、音域をあらわす数字が記されている（C2～C9）。派生音のベルには、異名同音の2つの音名を縦に並べて標記してある。

ベルの音高（ピッチ）は、鍵盤楽器のそれぞれの音と同じ高さを持っている。ただし実音は1オクターブ高い音である。

- (4) ハンドベルは、オクターブごとの一組のベルセットにより、初めて楽器としての機能を持つ。

ベルのセットは、最大で7オクターブ編成（85音、C2～C9）である。3～5オクターブのセットが一般的であり、楽譜のほとんどがそれ用である。因みに、本学が所有するセットは4オクターブであるが、しばしば5オクターブ目の音の必要性を感じている。

2. ハンドベルを始める前の準備について

- (1) ハンドベルの演奏に必要な道具を準備する。特に手袋、テーブル、パッド（スポンジ）、カバーは必要である。他に楽譜と譜面台も用意する。また、練習用スペースの確保も必要である。
- (2) 楽譜は、ほとんどの楽譜は、ピアノと同じ大譜表であるが、最初の頁に「演奏で用いる必要なベル」の一覧表が五線譜で表示してあるのが特徴である。

3. ハンドベル演奏について

- (1) 演奏の準備と片付け

まず、演奏前には机を並べ、隙間のないようにパッドを置きカバーを掛け、その上にベルを並べる。演奏終了後は、ベルは錆びを防ぐために一つずつ磨きケースに戻す。ケースを保管場所にしまう。

練習のたびにこのような準備や片付けをしなければならぬ。これも仲間と協力しながら行う大切なことである。

- (2) ベルを配分し、楽譜の音の担当者を決める。

基本は、隣り合った幹音2音とそれぞれの派生音である。本学の場合は、ベル編成と人数の関係でこの配分に苦慮し、常に工夫が必要となる。

- (3) 奏法について

ハンドベルには様々な奏法がある。基本的な普通奏法はリングといい、美しい音を鳴らすためには、常に注意深くベルを鳴らしこの奏法に習熟する必要がある。他に、音楽に変化を付けるために必要な奏法や消音効果のあるテクニック等がある。

Ⅲ 学燈会におけるハンドベル演奏

学燈会は、毎週月曜日、昼休みの20分間、駒澤学園記念講堂大ホールにおいて行われる。

駒沢女子大学・駒沢女子短期大学の、建学の精神にふれる場である。学長はじめ大学・短大の教員による講話が中心であるが、多分野の専門家の講演や音楽・伝統芸能などの文化に触れる機会でもある。近年は、学生の企画やサークル活動の発表の場としてもチャンスが与えられようになった。

筆者と保育科生有志によるハンドベルコンサートは、今回で2回目である。振り返ることとする。

（なお、ハンドベルの楽譜は邦人作品以外ほとんどが輸入楽譜である。そのため、プログラムの曲目、作曲者名などの記載は楽譜通りとする。）

1. 平成22年度（後期）ハンドベルコンサート

2010年12月13日(月) 12:30～12:50

駒澤学園 記念講堂大ホール

プログラム

・MICKEY MOUSE MARCH(3octaves)

by JIMMY DODD

・CANON(Originally“Canon in D”)(3octaves)

JOHANN PACHELBEL

Arranged by HAL H. HOPSON
・Pick A Winner “Quartet”(4octaves)

Lew Gillis

edited by Ardis Freeman

・ALADDIN < Prince Ali-Friend Like Me-A Whole
New World >(4octaves)

Music by ALAN MENKEN

Lyrics by HOWARD ASHMAN & TIM RICE

Arranged by DOUGLAS E. WAGNER

演奏者

10人編成(安田ゼミ生9名、安田淳子)

学燈会において、指導教員と学生が一体となって取り組むハンドベル演奏は、それまでに例のない初めての試みである。

平成22年度は、次年度からのカリキュラム変更に伴い、「保育総合ゼミ」の最後の年であったため、安田ゼミでは、保育総合ゼミ発表会(12月5日)においても、個人の研究発表(論述)とともにハンドベル演奏にも取り組んでいた。また、アンジェ クリスマスナイトコンサートでの演奏(本稿Ⅳの項参照)が予定されていたこともあり、その研究成果と活動の様子を披露する企画となった。

大ホールでの演奏では、どこまで観客にハンドベルの素晴らしさを伝えられるかがテーマであった。そこで、プログラムの選曲、構成に以下のような工夫を行った。

- ・オープニングでは、華やか奏法で、楽しい曲。
- ・次に、ハンドベルの普及の過程で生まれたハンドチャイム(クワイアチャイム)とのハーモニー(低音部のメロディーにクワイアチャイムを使用)。
- ・3曲目に、4人の奏者による、全曲がマレット奏法からなる素早い動きのカルテット。
- ・最後は、4オクターブの49音全てを使用し、演奏時間が7分を越える大曲。様々な奏法による表現の多彩さ、スケールの大きさ、チームワークによる一体感など、演奏者、聴衆の両者にとって、ハンドベル演奏の醍醐味に出会える曲。

また、演奏に際しては、ハンドベル演奏の特徴と魅力を伝えるために、演奏曲目ごとのベルの準備(ベルの並べ替え)の間を利用して、ベルについての基礎知識や演奏方法などの解説を行いながら会を進行した。

コンサートでは、本格的なハンドベル演奏に初めて触

れた観客の中から、驚きと感動の声が起り、好評のうちに、所期の目的を達成することが出来た。

2. 平成26年度(後期) ハンドベル コンサート

2014年12月22日(月) 12:30 ~ 12:50

駒澤学園 記念講堂大ホール

プログラム

・校歌 作詞 山上曹源 / 作曲 跡部晃

・OVER THE RAINBOW

from “The Wizard of Oz”(2octaves)

Music by Harold Arlen

arranged by Sandra Edwards-Hill

・Pick A Winner “Quartet”(4octaves)

Lew Gillis

edited by Ardis Freeman

・ALADDIN < Prince Ali-Friend Like Me-A Whole
New World >(4octaves)

Music by ALAN MENKEN

Lyrics by HOWARD ASHMAN & TIM RICE

Arranged by DOUGLAS E. WAGNER

演奏者

10人編成(音楽指導法履修者9名、安田淳子)

セメスター制の導入により、26年度より2年次選択科目音楽指導法が音楽指導法Ⅰ(前期)、音楽指導法Ⅱ(後期)と変更になった。これを機に、筆者担当の音楽指導法Ⅱでは、ピアノ演奏やアンサンブルなど、芸術性に裏打ちされた上質な音楽体験を大きなテーマとしている。最終授業では、記念ホールにおいて、スタインウェイフルコンサートグランドピアノでのピアノ独奏、連弾の発表を行う。こどもに引き合い、音楽の楽しさを伝え、表現する喜びを引き出すことの出来る保育者を目指すには、学生自身がより豊かな音楽体験を通して、感性を磨くことが求められると考えるからである。その授業の一環として取り組むハンドベルが、学燈会での発表に繋がった。以下に、26年度履修生のハンドベル演奏(希望者のみ)への取り組みと、学生の学びとその成果について述べる。

(1) 練習過程と学生の学び

実習終了後の2ヶ月半足らずという短期間で、心に届くハンドベル演奏がどこまで出来るかがテーマであった。演奏会まで以下の経過をたどった。

- 1) 練習は、先ず、「アラジン」から始めた。
曲の構成は、以下の通りでスケールが大きく初心者には、難しい曲である。
・全体が4つの部分からなりハ短調→ハ長調→二短調→二長調と転調する
・4オクターブ、49音全てのベルを使用する
・異名同音のベルがいくつもあり、楽譜に書かれた音は、全部で62音である
・9音からなる和音進行が随所にある
しかし、学生にとっては大好きな曲であり、ビデオで鑑賞した先輩の演奏に魅せられ、どうしても演奏したい気持ちに駆られ挑戦することになった。
- 2) 音読みの段階では、始めに各自に割り当てられた音を楽譜上で探し、実際のベルを確認する作業に時間をとられる。ピアノで慣れ親しんでいるドレミファと、ベルに記されている英・米の音名とが、なかなか一致しない学生もいる。
- 3) 楽譜を音にしていく。中音域や高音域の担当者の中には、自分の音がメロディーや伴奏や和音の一部となって出てくるため、リズムを数えながら音を鳴らすタイミングに戸惑っている。低音域の担当者は伴奏部分の受け持ちが多く問題が少ない。
- 4) 全体練習を始める。なかなか足並みが揃わず、中音域の問題箇所をやり直しや確認に時間を取られ、その間低音域担当者は待たされることが多い。
- 5) この時期に、低音域担当者には「Pick A Winner」を提案する。皆やる気を刺激され授業以外での自主練習にも楽しみながら取り組み、マスターするのが早い。学生のモチベーションを上げるための筆者の狙いと思いが通じた一例である。
- 6) 一方、12月に入っても、「アラジン」は全曲通すことが出来ない。中音域担当者は、スムーズな動きに繋がるように、隣同士でベルの融通（借りるベル、共通のベル）の見直しや習熟に苦心する。
- 7) 授業以外での朝練習、昼練習を自分達で計画したものこの頃である。正味25分程度で、全員が揃えないことも多いのだが、貴重な時間であった。
- 8) 「Pick A Winner」奏者以外の学生に「OVER THE RAINBOW」を示し、初見で合わせる。大分力がついてきており、各自何箇所かのポイン

トを部分練習すればすぐにでも全体を通せるようになる見通し。「アラジン」で煮詰まった心を解き放ち、自信とやる気を取り戻す。

- 9) 全員で「校歌」に取り組む。ピアノの伴奏楽譜のために戸惑いはあるが、すぐに慣れるであろう。
- 10) 本番2週間前の会場リハーサルでは、思いがけずその日の学燈会のコンサートのために、反響板がセットされていたため、緊張感を持って臨めたが、本番通りの全曲演奏は初めてで、最悪な状態である。何時、本気モードになるかにかかってくる。
- 11) 演奏会前日の日曜日の練習では、1名が参加できなかったが、不在者の音を感じながら演奏することが出来ている。初めて、本番では期待できそうな手ごたえを感じる。
- 12) 演奏会当日は、1時限の授業開始30分前には最終リハーサルを開始、その後の講堂への楽器移動も順調に運んだ。会場は、中・高の終業式が終了しすでに反響板のセッティングが完了していた。僅かな時間であったが、本番の雰囲気を感じながら最終チェックを行うことができた。そして筆者と学生全員はそれぞれ2時限目の授業へ向かった。

(2) 演奏会直前の成長と新たな不安

これまでの練習過程で、それぞれの学びを通して、表現者として成長するに伴い、演奏会直前には、新たな不安を感じるようになっていく。

- ・自身の演奏部分に不安が残ってしまった、皆に迷惑掛けたくない。いかに音楽に集中できるか。
- ・上がり症で、ピアノ演奏の時はいつも本番で頭が真っ白になってしまう、ミスが出て自分を見失わず音楽を中断せずに繋げていかななくては。
- ・チームとしての完成度の低さが気になり、皆の気持ちが一つにならなくては。

その中で、自発的に仲間にも本番に望む姿勢や気持ちの高め方を伝授、「楽しみながら演奏しよう」と、全員の気持ちをついにまとめるリーダー格の学生の存在が光った。その学生は、中高6年間の吹奏楽経験や短大での音楽経験などを通して、人に聴いてもらう喜びを知っている学生である。

(3) 演奏会での出会いと共感

学燈会のコンサート会場には、保育科では原則参加の1年生、クラス仲間の2年生や多くの専任の先生方

を始め、大学の先生や職員の方、また聞くところによると高校の先生や偶然来校中の近隣幼稚園の園長先生も出席して下さいとのことである。

演奏会終了後には、次のような感想が寄せられた。

- ・素晴らしかった、感激した
- ・今までで他に聴いた中で、一番よかった
- ・とても心地よく癒された
- ・「心のハーモニー」と言われる音楽が解った
- ・ベルをマレットで打ち鳴らすのにはびっくり
- ・4人で演奏した曲は、速くて移動も大変そう
- ・大きなベルは重そう
- ・素晴らしかった、こどもたちにも聞かせたい
- ・久しぶりに学生の演奏が聴けた、良かった

など、ハンドベルの音楽や多彩な表現に始めて接した率直な感想であり、また、真摯で上質な演奏発表への好評価としてありがたく受け止めたい。

一方、学生の演奏後の感想は次の通りである。

- ・本格的なステージでの演奏にわくわくした
- ・本番では全員が集中でき、一番良い出来だった
- ・個人的には少し間違えたが、乗り越えられ嬉しかった、自信になった
- ・客席からの拍手が嬉しかった、達成感を持った
- ・とても楽しかった

どの顔からも晴れ晴れしい喜びの表情が輝いていた。

コンサートは、最後に会場の全員がハンドベルの伴奏で校歌を歌って終了したが、歌詞にある「眺めもひろき武蔵野に 美はしの宮造らばや」を、コンサートでの出会いの場で一瞬でも体現できたのではないかと思う。ここでも音楽の力を実感する。

IV ハンドベル演奏と社会貢献

筆者は、平成14年度より、京王フローラルガーデンアンジェとの文化的交流活動（クリスマスコンサート）を行ってきた。開園半年のアンジェが、10月の「オータムローズフェア」のイベントの一つとして、本学りんどう祭に併設大学卒業生の縁で出店した。その際に、短大保育科安田ゼミのハンドベル演奏の評判に接したことがきっかけとなった。

京王フローラルガーデン アンジェにおけるハンドベル演奏について

平成14年（2002年）10月に京王電鉄株式会社か

ら協力依頼があり、その年の3月に京王多摩川駅（調布市）に隣接して開園した欧風庭園「京王フローラルガーデン アンジェ」の初めてのクリスマス関連のイベント企画において、保育科安田ゼミの学生がハンドベル演奏によるコンサートを行った。演奏終了後に観客に直接ベルに触れ、楽しんでいただく機会を提供する交流の時間を設けた。この企画が好評を得て、以来24年度までの11年間毎年コンサートに出演している。（保育科2年生有志と安田淳子：企画・演奏指導、演奏・進行）

初めてのコンサートは、「駒沢女子短期大学保育科生によるハンドベル演奏」で、12月21日（土）、22日（日）の両日、夕方からの各2回・全4回公演であった。

会場は、アンジェが「都会に暮らす人たちのオアシス」のコンセプトで開園した庭園であることから、当初はカナルサイドガーデンでの開催予定であった。双方ともに、初めての企画で手探りの状態であったため、ハンドベル演奏が屋外では不向きであるという、一番大事なことの確認がなされていなかったのである。因みに初日は、強風による天候不良のため、急遽屋内に会場変更するというアクシデントからスタートした。結果的にその後の屋内での演奏会が定着するきっかけとなった。

コンサート会場となったセミナールームは、欧米家庭でのクリスマスをイメージしたクリスマスツリーやディスプレイの素敵な雰囲気であった。全6曲を演奏、その後の交流まで和やかな中にも熱気にあふれた会（プログラム等は後述、平成14年度を参照）となり、至福の時を観客と共有することができた

筆者の企画・指導と演奏・進行による上質の演奏と演奏後の交流（観客にベルに触れる機会の提供）、そして、何よりも保育科学生の礼儀正しく、真面目で、演奏での真摯な取り組みや交流会での親切で和やかな対応に主催者から感激したとの評価を得て、その場で、翌年のコンサート出演依頼を受けた。以来、年々評判が高まり、クリスマスコンサートの欠かせない存在として活動を続けることになる。

以下に、アンジェ クリスマスコンサートについての振り返りを行う。

平成14年度

2002年12月21日（土）、12月22日（日）

① 16:15 ② 18:00 全4回公演

10人編成（ゼミ生9名、安田淳子）

- ・ Do-Re-Mi From“THE SOUND Of MUSIC”
Words by OSCAR HAMMERSTEIN II
Music by RICHARD RODGERS
Arranged by Martha Lynn Thompson
- ・ OVER THE RAINBOW
from“THE WIZARD OF OZ”
by E. Y. HARBURG and HAROLD ARLEN
Arranged by DOUGLAS E. WAGNER(ASCAP)
- ・ ALADDIN < Prince Ali-Friend Like Me-A Whole
New World >
Music by ALAN MENKEN
Lyrics by HOWARD ASHMAN & TIM RICE
Arranged by DOUGLAS E. WAGNER
- ・ Silent night Franz Gruber
arr. Daniel E. Hermany
- ・ JINGLE BELLS James Pierpont
Arr. by Douglas E. Wagner(ASCAP)
- ・ White Christmas By IRVING BERLIN
Arranged by Cynthia Dobrinski

学外でのハンドベル演奏会は筆者にとっても始めてである。出演依頼からコンサートまでの二ヶ月余は、ゼミでの論文作成、保育総合ゼミ発表会準備と重なり、練習時間の確保がかなり厳しいものであった。しかし、りんどう祭での「アラジン」の演奏に達成感を得られなかった学生にとって、絶好の再挑戦のチャンスでもあった。クリスマス用の曲目を3曲追加し全6曲の練習に自発的、意欲的に取り組み、演奏会の成功に繋げている。演奏の質の高さと、チームワーク、音楽を伝える心、共に楽しむ心、そのすべてに出色の出来栄であった。

平成 15 年度

2003年 12月 21日(日)、12月 23日(火・祝)
① 16:15 ② 18:00 全4回公演
4人編成(ゼミ生3名、安田淳子)

- ・ Pick A Winner “Quartet” Lew Gillis
edited by Ardis Freeman
- ・ ハイホー (HEIGH HO) Words by Larry Morey
Music by Frank Churchill
大石由紀子 編曲
- ・ ハリーポッター (handbell trio) ゼミ生 編曲
- ・ Silent night Franz Gruber

- arr. Daniel E. Hermany
- ・ WE WISH YOU A MERRY CHRISTMAS
English Carol
Arranged by Tammy W. Rawlinson
- ・ GYMNOPIEDIE Erik Satie
- ・ The Hallelujah Chorus from Handel’s “Messiah”
(for Handbell Quartet) G. F. Handel
Arranged by MICHAEL R. KELLER

学生3名の少人数チームは初めてのケースである。カルテット用に編曲された4オクターブの「ハレルヤ コーラス」「Pick A Winner」を中心に選曲を行った。前年度の先輩のスケールの大きい、音楽的に優れた演奏に接しハンドベルに魅せられた学生にとって、音域の狭い2オクターブの曲では満足できないところであった。そこでピアノ上級者で音楽的レベルも揃っていたことから、学生が自分たちでトリオ用の編曲を研究テーマとして、実際に演奏しながら転調や、奏法にも工夫を凝らして作り上げた作品(ハリーポッター他2曲)を披露し、所期の目的を果たした。

うち2名の学生は、卒業後も保育園に勤務しながら毎年コンサートと交流会に参加、23年度のコンサートで再び演奏者として出演している。演奏での成功体験が音楽的興味の継続をもたらした、貴重な証明であるといえるであろう。

平成 16 年度

2004年 12月 23日(木・祝)、12月 25日(土)
① 16:15 ② 18:00 全4回公演
4人編成(ゼミ生3名、安田淳子)

- ・ ミッキーマウス・マーチ (MICKEY MOUSE MARCH)
Words and Music by Jimmie Dodd
大石由紀子 編曲
- ・ OVER THE RAINBOW from“The Wizard of Oz”
Music by Harold Arlen
arranged by Sandra Edwards-Hill
- ・ My Grandfather’s Clock HENRY C. WORK
Arr. by MARTHA LYNN THOMPSON
- ・ The Hallelujah Chorus from Handel’s “Messiah”
(for Handbell Quartet) G. F. Handel
Arranged by MICHAEL R. KELLER
- ・ Christmas Medley

JOY TO THE WORLD George Friedrich Handel
Arranged by Allan Robert Petker
WE WISH YOU A MERRY CHRISTMAS

English Carol
Arranged by Tammy W. Rawlinson
JINGLE BELLS J. Pierpont
Arranged by Fred Bock
SILENT NIGHT, HOLY NIGHT Franz Gruber
Arranged by Fred Bock

前年度に引き続き、学生3名の少人数チームであった。曲目は、前年の先輩の演奏に憧れ「ハレルヤ」に挑戦し、他は2オクターブ用の作品から馴染みのある曲を選び、音楽の楽しさを伝えることをテーマとした。クリスマスの曲は、4曲で一つの世界を表現するためメドレーで演奏するようにした。

演奏の準備から発表会までの全ての過程で、個々の責任は重いものがあったが、メンバーの結束力は強まり真摯な演奏姿勢から、その成果を得られた。

平成 17 年度

2005年 12月 23日(金・祝)、12月 25日(日)

① 16:15 ② 18:00 全4回公演

7人編成(ゼミ生4名、大学生2名、安田淳子)

- ・ MICKEY MOUSE MARCH Jimmy Dodd
- ・ 大きな古時計 H. C. Work
編曲 谷本智子
- ・ Chopsticks (handbell trio) arr. Dawn. Thompson
- ・ ALADDIN <Prince Ali-Friend Like Me-A Whole
New World>
Music by ALAN MENKEN
Lyrics by HOWARD ASHMAN & TIM RICE
Arranged by DOUGLAS E. WAGNER
- ・ AMAZING GRACE American Folk Song
Arr. by Ruth Artman
- ・ Silent night Franz Gruber
arr. Daniel E. Hermany

ゼミ生以外に初めて、併設大学から2名の学生(4年生、2年生各1名)がメンバーに加わった。うち1名は、ピアノ経験もなく初めてのベルに挑戦することになった。

ピアノが不得手な保育科生も含めたこのチームで、指

導者の力が確かめられる年となった。選曲、ベルの配分、演奏途中でのベルの持ち変えなどに工夫を凝らし、また、練習の段階から多くの時間をかけて関わる指導により、当日は、観客と感動を分かち合うまでの演奏を行うことが出来た。

前年の演奏会での感動や、そのベルの素晴らしさを自分でも表現できるという喜びが、前向きな気持ちを生み、真面目に練習を積み上げることの出来た学生個々の頑張り、努力の成果と言える。

平成 18 年度

2006年 12月 23日(土)、12月 24日(日)

① 16:15 ② 18:00 全4回公演

6人編成(ゼミ生2名、他ゼミ生1名、大学生2名、
安田淳子)

- ・ ミッキーマウス・マーチ(MICKEY MOUSE MARCH)
Words and Music by Jimmie Dodd
大石由紀子 編曲
 - ・ Parade of the Tin soldiers Leon Jessel
Arr. Sandra Edwards-Hill
 - ・ 「それ行け!アンパンマン」より
アンパンマンのマーチ Words by Takashi Yanase
Music by Takashi Miki
Arranged by Youshi Matsuyama
 - ・ 大きな古時計 作曲 H. C. Work
編曲 谷本智子
 - ・ The Hallelujah Chorus from Handel's "Messiah"
(for Handbell Quartet) G. F. Handel
Arranged by MICHAEL R. KELLER
 - ・ JOY TO THE WORLD G. F. Handel
arr. Allan Robert Petker
 - ・ Jingle Bells "Quartet" J. Pierpont
Arranged by Kevin McChesney
 - ・ Silent Night, Holy Night Franz Gruber
Arranged by Arnold B. Sherman
- 昨年のメンバーから大学生1名が残り、新たにコンサートのわずか1ヶ月程前に大学生が1名参加した。楽譜も読めない状態でのメンバー入りは、異例のことであったが、ベルで2曲を、また他の曲でも打楽器を担当して仲間として演奏の夢を実現させた。
- 担当するベルを、本人のレベルに合わせて選び、他のメンバーが一部をカバーするなどの配慮を行う一方、

授業の空き時間に友人であるゼミ生が付きっきりで、音の読み方とそれぞれの楽譜の音の関係を特訓した。本人の必死の努力もあって、全体練習で徐々に自分の出番で音が出せるようになると、手応えや、嬉しさがエネルギーとなって音楽を楽しめるまでになった。初心者でも演奏できるというハンドベル演奏の魅力の一つを証明した良い例である。

平成 19 年度

2007年 12月 23日(日・祝)、12月 24日(月・振休)

① 16:15 ② 18:00 全 4 回公演

5 人編成(ゼミ生 1 名、他ゼミ生 3 名、安田淳子)

- ・ミッキーマウス・マーチ(MICKEY MOUSE MARCH)
Words and Music by Jimmie Dodd
大石由紀子 編曲
- ・OVER THE RAINBOW from“The Wizard of Oz”
Music by Harold Arlen
arranged by Sandra Edwards-Hill
- ・さんぽ ～オープニング主題歌
中川李枝子 / 作詞 久石譲 / 作曲
- ・故郷(ふるさと) 作曲 岡野貞一
編曲 谷本智子
- ・The Hallelujah Chorus from Handel’s“Messiah”
(for Handbell Quartet) G. F. Handel
arranged by MICHAEL R. KELLER
- ・Joy to the World(Antioch) G. F. Handel
Arranged by Judy Hunnicutt
- ・Jingle Bells “Quartet” J. Pierpont
Arranged by Kevin McChesney
- ・White Christmas By IRVING BERLIN
Arranged by Cynthia Dobrinski

メンバー集めに苦労した年である。結果的には、気の合った、音楽的にも協調できる仲間が揃い、練習も順調に進み完成度の高い演奏になった。「さんぽ」「ふるさと」は、会場の皆さんに歌っていただき、和やかな雰囲気のコネクションになった。演奏における仲間との協調、一体感の尊さを物語っている。

平成 20 年度

2008年 12月 21日(日)、12月 23日(火・祝)

① 17:00 ② 19:00 全 4 回公演

9 人編成(ゼミ生 7 名、他ゼミ生 1 名、安田淳子)

- ・MICKEY MOUSE MARCH by JIMMY DODD
- ・Westminster Chimes(Cambridge Quarters)
WILLIAM CROTCH
Arr. by FRANCES L. CALLAHAN
- ・Morning- I. II EDVARD GRIEG
Arr. by FRANCES L. CALLAHAN
- ・OVER THE RAINBOW from“The Wizard of Oz”
Music by Harold Arlen
arranged by Sandra Edwards-Hill
- ・Pick A Winner “Quartet” Lew Gillis
edited by Ardis Freeman
- ・HALLELUJAH from the“MESSIAH”
G. F. Handel
transcribed by Martha Lynn Thompson
- ・ウィンター・ワンダーランド(WINTER WONDERLAND)
Words by Dick Smith
Music by Felix Bernard
大石由紀子 編曲
- ・JOY TO THE WORLD George Friedrich Handel
Arranged by Allan Robert Petker
- ・WE WISH YOU A MERRY CHRISTMAS
English Carol
Arranged by Tammy W. Rawlinson
- ・Silent Night, Holy Night Franz Gruber
Arranged by Arnold B. Sherman

一年目の 10 人編成以来、少人数での編成が続いていた。9 人編成となったこの年は、ベル演奏の基本に戻り各自の担当ベルを出来るだけ無理をせず、美しい音、全体で音楽的に調和した演奏を目指し、選曲(オクターブ編成)を行っている。9 人編成での「ハレルヤ」は、美しく迫力のあるものであった。

平成 21 年度

2009年 12月 20日(日)、12月 23日(水・祝)

① 17:00 ② 18:30 全 4 回公演

9 人編成(ゼミ生 8 名、安田淳子)

- ・MICKEY MOUSE MARCH by JIMMY DODD
- ・OVER THE RAINBOW
from“THE WIZARD OF OZ”

① 2octaves Music by Harold Arlen
arranged by Sandra Edwards-Hill

② 4octaves
by E. Y. HARBURG and HAROLD ARLEN

Arranged by DOUGLAS E. WAGNER (ASCAP)
・ CANON (Originally “Canon in D”)

JOHANN PACHELBEL

Arranged by HAL H. HOPSON

・ Tritsch-Tratsch Polka Johann Strauss, Jr.
Arr. by Mark Weston (ASCAP)

・ Pick A Winner “Quartet” Lew Gillis
edited by Ardis Freeman

・ Jingle Bells “Quartet” J. Pierpont
Arranged by Kevin McChesney

・ SILENT NIGHT FRANZ GRUBER
Arranged by CYNTHIA DOBRINSKI (ASCAP)

7年振りに全員がゼミ生という9人編成のチームとなった。当初はハンドベルに対する思い入れに程度の差が見られ、まとまりに欠ける嫌いがあった。チームとしての見通しが立たずに、選曲にも苦慮した。徐々に、仲間意識が芽生えお互いに励まし合いながら、脱落者を出さずに演奏会を迎えた。

平成 22 年度

2010年 12月 23日(木・祝)

① 16:45 ② 18:00 全2回公演

10人編成(ゼミ生9名、安田淳子)

・ MICKEY MOUSE MARCH by JIMMY DODD

・ 『となりのトトロ』より さんぽ 久石譲 作曲
岡本和子 編曲

・ CANON (Originally “Canon in D”)
JOHANN PACHELBEL

Arranged by HAL H. HOPSON

・ Pick A Winner “Quartet” Lew Gillis
edited by Ardis Freeman

・ ALADDIN < Prince Ali-Friend Like Me-A Whole
New World >

Music by ALAN MENKEN

Lyrics by HOWARD ASHMAN & TIM RICE

Arranged by DOUGLAS E. WAGNER

・ Jingle Bells “Quartet” J. Pierpont

Arranged by Kevin McChesney

・ Silent Night, Holy Night Franz Gruber

Arranged by Arnold B. Sherman

ゼミ学生としては唯一学燈会での演奏を経験している(本稿Ⅲ 学燈会とハンドベル演奏の項 参照)が、アンジェコンサートの出演は、授業スケジュールと休日の関係で唯一1日のみとなった年である。

チームの人数から、各自の担当するベルに余裕があったが、逆に広い音域でバランスよく音がある曲を選曲しにくかった。そこで、カルテット用の「ジングルベル」を6名で担当、また「カノン」では、クワイアチャイムも使用するなどの工夫と、全体的には音楽的な表現を深めることに重きを置いた。

平成 23 年度

2011年 12月 23日(金・祝)、12月 24日(土)

① 16:45 ② 18:00 全4回公演

7人編成(2年生2名、卒業生4名、安田淳子)

・ MICKEY MOUSE MARCH by JIMMY DODD

・ ウィンター・ワンダーランド(WINTER WONDERLAND)
Words by Dick Smith

Music by Felix Bernard

大石由紀子 編曲

・ OVER THE RAINBOW from “The Wizard of Oz”

Music by Harold Arlen

arranged by Sandra Edwards-Hill

・ 崖の上のポニョ 作曲 久石譲

・ Pick A Winner “Quartet” Lew Gillis
edited by Ardis Freeman

・ The Hallelujah Chorus from Handel’s “Messiah”
(for Handbell Quartet) G. F. Handel

arranged by MICHAEL R. KELLER

・ JINGLE BELLS James Pierpont

Arr. by Douglas E. Wagner (ASCAP)

・ Silent Night Franz Gruber

arr. Daniel E. Hermany

昨年度で保育総合ゼミが終了したため、2年生有志2名、卒業生で15年度演奏者2名、21年度演奏者1名・未経験者1名がメンバーとして参加。全員が、現役の保育者である。数少ない土曜日の休日(時には勤務終

了後)を利用しての練習であったため、満足な時間は確保できなかったが、意気込みと演奏会経験者としての誇りが、集中力を生み良質な演奏まで高めていった。ピアノ上級者である2年生には、先輩の姿勢に学ぶところが大きかった。

平成 24 年度

2012年 12月 23日(日・祝)、12月 24日(月・振休)

① 16:45 ② 18:00 全 4 回公演

5人編成(2年生3名、卒業生1名、安田淳子)

- ・ウィンター・ワンダーランド(WINTER WONDERLAND)
Words by Dick Smith
Music by Felix Bernard
編曲 大石由紀子
- ・OVER THE RAINBOW from“The Wizard of Oz”
Music by Harold Arlen
arranged by Sandra Edwards-Hill
- ・さんば 作曲 久石譲
- ・風のとおり道 作曲 久石譲
- ・「キラキラ星変奏曲」 Mozart
TEMA, VAR. V, VAR. VIII, VAR. IX
- ・Silent Night Franz Gruber
arr. Daniel E. Hermany

社会人学生を含む3人の学生は、それぞれが個人事情を抱えハンドベルとの両立で悩んだが、一人も欠けられないという状況下で責任を全うすることが出来た。また、前年度に続いて卒業生(現役保育士)が応援としてメンバーに加わっている。自身3度目の出演である。この卒業生の存在が大きいと言える。

以上、ここまでアンジェでのコンサートについて年度毎に振り返りを行ってきた。

演奏会では、例年、2日間・各回ともに、演奏者の家族や友人、関係者はもとより、乳幼児から高齢者まで様々な年齢層の人々が、地域や遠方からハンドベルを楽しみに参集する。始めてという方もあるがリピーターの方たちも多く、中には第1回から11年連続の人達もいる。演奏経験者や卒業生(パートナーや子連れのケースも)などいろいろな人々からの応援を受けた。また、偶然来園した現職保育者である卒業生との再会等もあった。

また、演奏後恒例の交流の時間には、観客の方にベルを鳴らす体験のひと時を提供しているが、年々、さまざまな年齢層の参加者や積極的に楽しむ人々が増加するなどの盛況ぶりである。とりわけ、こどもたちの積極性と嬉々として楽しんでいる姿には感動すら覚える。また、一人ひとり丁寧に対応する学生の姿も嬉しそうである。

このように、本活動は、本来的には特定研究・保育総合ゼミでの演奏発表の流れを継承するため、指導者である筆者と学生有志による研究的な活動であり、研究成果を学外の演奏会で発表する絶好の機会として、誠実に節度ある演奏を心がけてきた。アンジェのクリスマスイベントのメインコンサートとして実績を重ね、主催者からは、地域に根ざした活動として、地域貢献を高く評価され、常に期待される存在となっていた。

アンジェ開園の年からの固定ファンや地域の人々からの支持を受けて、演奏と交流を継続してこられた理由もそこにみられる。

その中でも、観客の一人であった高校生が、数年後に、本学安田ゼミ生としてコンサート出演を果し、地域の保育者として巣立ったケースがあった。コンサートでのハンドベルの演奏に魅せられ、憧れ、自分もやってみたいという思いを実現させたのである。本学のハンドベル演奏が地域に根ざした文化的交流活動としての証の一つと言えるのではないかと。

V まとめ

以上、ここまで、ハンドベル演奏における学生の学びと成果及び、教育的意義について、学燈会とアンジェにおけるコンサートの年度毎の活動の振り返りを通して、考察を行ってきた。

最後に、二つの活動と密接な関わりを持つ、保育総合ゼミ、特にアンジェ出演のきっかけとなった平成14年度の安田ゼミの活動について触れておきたい。

保育総合ゼミは、平成13年度より、幼稚園教諭免許及び保育士資格取得のための必修科目(2年次・通年)として平成22年度まで開講された。2年生全員が履修し、中間発表会、保育総合ゼミ発表会で発表を行い、最終的には学生が個々に研究論文を提出し論集にまとめる。

ゼミの活動は、1年次12月の2年生の発表会への出席から始まり、直後に次年度ゼミ受講希望調査、1月早々に配属ゼミの決定、各ゼミオリエンテーションがなされた。これらは、動機づけや興味の継続、春休みの有

効活用などを考慮したものである。

アンジェ出演のきっかけとなった平成 14 年度の安田ゼミの場合、ゼミ生全員 12 名で 4 月の新入生歓迎会での演奏を目標に、春休み中から活動を始めた。

先輩のハンドベル演奏に感動し自分でもやってみたい、頑張りたいと意気込み、初めて実際のベルに触った。ベルは音によって大きさや重さも異なり、音を出すのも難しいと初めて知る。自らが鳴らした音に驚き、心地よい響き、きれいな音に感激する。

ベルを鳴らすリングの練習では、音が出るタイミング、打つ強さ、合わせることや音の止め方が難しいと気づく。個人練習の段階では、自分の受け持つ音だけは曲にならない意外に地味な作業だと認識し、早く曲を演奏したいとの気持ちが逸る。

全体練習では、皆の音を聞きながら演奏できる面白さに、演奏会へ向け気持ちが高鳴る。演奏曲「ドレミ」の完成を目指し、曲の盛り上げや歌うように演奏するためには、高度な表現や自発的な練習時間の必要性、さらに皆の心をつなぐこと、一人ひとりがとても大切な存在であることを自覚する。

演奏会では、春休み中で全体練習が十分に取れなかった当初の不安な気持ちは、お客さんの反応の良さに安心して演奏に集中でき、演奏後の大拍手に感激し、達成感へと変化している。中でも読譜が苦手なベルへの苦手意識をぬぐいきれないでいる学生も練習過程や本番での成功を通して、ベルの楽しさや成功した時の喜びを感じられるようになり、もっと練習してうまくなりたいと気持ちが前向きになっている。人に聴いてもらう喜びや楽しい音楽体験が自信や意欲に繋がり、音楽の潜在能力を引き出す、まさに音楽の力である。

学生は、ハンドベルとの初めての出会いからわずかの間に新入生演奏会を体験することにより、ハンドベルで学ぶべき多くのことに気づき、その後の演奏に繋げている。12 名の内 9 名の学生は、新入生歓迎会での成功体験後、中間発表会、りんどう祭、アンジェクリスマスコンサートへと、1 年間を通じてハンドベル演奏を深めていくことになる。

ハンドベルは、個々のベルが一つになって初めて楽器として音楽を奏でることが出来る。演奏者は、常に一定の音楽目標に向かって互いに協力し、仲間と共に演奏を行う。一人ひとりがそれぞれ欠くことのできない存在であると同時に、責任を負うものである。

初めは、楽譜から各自に割り当てられた個々の音を正

確に読み取ることが必要であるが、楽譜通りに音を鳴らすのは、初心者にとっては、本人が思っているよりも難しい。しかし、ハンドベルに憧れを抱く人であれば、誰でもハンドベルを手にとって、とにかく音を出せるものでもある。

また、ベルの配分を調整することにより、少ない音の担当であっても、全体として豊かな楽しい音楽体験も可能である。一方、確かな音楽的な能力を持つ人達で構成されたチームであれば、ハンドベルの魅力を十分に表現できる。これは、ハンドベルの場合、一つの作品に複数の編曲版があり、ベル編成やチームの音楽的経験やレベルに合わせていろいろな選曲が可能であることも大きいといえる。

ベルに出会った学生は、仲間とともに一つの音楽を作り上げる目的に向かい、心をつなげた演奏体験を通して、演奏する楽しさ、聴衆と一体となる感激、喜びや音楽の力を改めて感じる事が出来る。ベルの響きが人々をつなぎ、その魅力を分かち合っているといえるであろう。

ここにも、ハンドベルの音楽的、教育的魅力とその意義を見出すことが出来る。

VI 終わりに

本学で、筆者がハンドベルに取り組んだのは平成 5 年（1993 年）のことであるが、その当時、日本ではすでに、日本ハンドベル協会誕生後の急成長期にあり、全国で短大として始めて発足したクワイア（和泉短期大学）の活動も 10 年を迎えている。クワイアを発足させ、世界的なレベルへと育成した指導者下田和男氏が、新しい演奏チーム「Green Meadow ハンドベルリンガーズ」を発足させたのが、その 1993 年である。現在では国内外からその技量が極めて高いとの評価を得ている。

今回、筆者が本稿をまとめるに当たり、下田氏のハンドベル指導 30 年間の集大成として、今秋自費出版された「イングリッシュ・ハンドベルとハンドチャイムのリンガート指導者のための教本」に出合った。筆者は、氏の 30 年間の一線でのベル活動経験に裏打された豊富な知識や、示唆に富んだ内容で特に、第 2 章 ハンドベルの魅力（音楽的、教育的視点から）において、ハンドベルを音楽的にも教育的にも魅力の宝庫であるとする熱い思いに接した時、かつての氏と同じような感慨を覚えた。

それは、下田氏がかつて、ドナルド・E・アルレッドの名著「Joyfully Ring!」の訳書「Joyfully Ring! ハンドベルリンガーズと指揮者のための手引き [初級編]」³⁾

のあとがきに、「原著は、ハンドベルについての基礎的な手引書として大変分かりやすく示唆に富んだ内容です」「訳に当たっては、一字一句に納得しながら、時に共感し、また新しい発見をさせていただき、さらに勇気付けられ、楽しみながら翻訳を終えることが出来ました」と記している。

筆者とは比較にならないが、仏教系の短大保育科で自らのクワイアを持たずに、毎年出会った学生との一回限りの演奏会（活動）の、20年間の積み重ねの中で得た自分なりの信念や、学生との関わりなどが間違いではなかったとの思いを強くし勇気付けられた。今回このタイミングでの下田和男氏の著書との出会いに深く感謝したい。

また、共に研究をした学生、卒業生を始め、ハンドベルを通して出会ったすべの方々に、本稿を通して感謝の気持ちを伝えさせていただく。

注) 本学における筆者のハンドベルとの出会いとその経緯や、平成12年度までの特定研究における学生との研究、指導発表については、昨年度の本学「研究紀要第47号」で考察を行っている。

参考引用文献

- 1) 大図説 世界の楽器 Musical Instruments of the World 日本語版監修 皆川達夫 昭和56年4月 小学館

参考:「大図説 世界の楽器」について

皆川達夫氏は、監修者あとがきで、本書の特徴の第一に、「4000点に余る図版によって、もろもろの楽器の姿を具体的に提示している。それも外観を描くだけでなく、その楽器の構造や特徴、歴史的変遷から奏法まで、一目で理解できるように細かいふうを凝らしている」としている。

本書では、楽器の分類を、エーリッヒ・ホルンボステルとクルト・ザックスの体系により、「5部類法」即ち、楽器をその発音の方法により、「気鳴楽器」「体鳴楽器」「膜鳴楽器」「弦鳴楽器」「機械、電気楽器」に分類している。

- 2) Angel Tidings イングリッシュ・ハンドベルとハンドチャイムのリンガーと指導者のための教本 2014年10

月 下田和男著（自費出版）

参考:本書は、著者のハンドベル指導30年間の集大成として、「多岐に渡り理論的でありながら、実践的な内容となるよう心掛け（中略）自由な立場と発想で自費出版した」（本著「はじめに」から）。

- 3) Joyfully Ring! ハンドベルリンガーズと指揮者のための手引き [初級編] ドナルド・E・アルレッド著 下田和男訳 1993年2月 共同音楽出版社

参考:本書の著者ドナルド・E・アルレッドは、当時、ハンドベルの先駆的な立場にあり、アメリカのハンドベル指導者の第一人者である。